

## 第二の自然と理性的動物

慶應義塾大学 岡部幹伸

### はじめに

セラーズおよびセラーズを受け継いだマクダウェルによれば、正当化が行われ、規範的な関係が結ばれる理由の空間と、自然科学による探究の領域であるような法則の領界は、互いに全く異なるものである。そうすると、理由の空間において機能する人間の概念能力や合理性、理性といったものが自然のうちには場所を持たないように思われてくる。ここでは、現代哲学の前提となっている科学主義と、人間に特有のものであるように思われる思考や行為をそのようなものとして理解することとの両立が危ぶまれている。一方の極には「露骨な自然主義」があり、還元主義的なモチベーションから、人間の合理性も法則の領界にあるものだけから再構成できると主張する。もう一方の極には「居丈高なプラトニズム」(McDowell 1996a, 77. 邦訳、135)があり、理由の空間の独自性を強調することを、理性の要求を自然化することの拒否だと解釈する。

マクダウェルはこの両者の間を取り、人間の合理性を科学主義ではない仕方自然化しようとする<sup>(1)</sup>。人間の合理性は「第二の自然」であり、他の動物と同じような第一の自然として生まれた人間は、潜在能力として第二の自然を持ち、成長の過程でそれを現実化する。しかしながら、第二の自然がどのようにして現実化するのかに関してマクダウェルはあまり詳細に語っていない。そのため、解釈者たちは第一の自然と第二の自然という考え方には不整合があるのではないかと指摘したり、あるいは逆にマクダウェルを補完しようとして特に「陶冶 (Bildung)」の概念を解釈したりしてきた。

本稿ではマクダウェルが提示する第二の自然という考え方を擁護することを目指す。陶冶や共同体における伝統の継承という『心と世界』でマクダウェルが持ち出す概念を通じてそれを行うわけではない。マクダウェルは最近の論文で、第一の自然についての自らの考えの変更を表明している (McDowell 2022)。私はそれを有効な立場の変更と理解しているため、その方向を徹底化することで第二の自然という考え方を擁護する。人間は幼児においても単なる動物とは異なるのである。

ここで一つ注意を促しておきたい。第二の自然という考え方の是非を問う本稿の問題設定は、マクダウェル解釈にすぎない比較的小さな問題を問うているように思われるかもしれない。だがそれは間違っている。我々は自由な存在として自らを理解するが、その生が諸法則に支配されていることもまた

理解している。思考や行為の独自性と自然科学的探究の緊張関係がここで問題になっており、それは現代哲学ならび分析系ドイツ観念論の最重要課題である。たとえば、コナントとケルンは「シリーズ分析系ドイツ観念論」の狙いが「心と自然の統一」をめぐる問いが真正の問いであることを理解させることだと言っている（Conant and Kern 2017, 7）。第二の自然はこのような問いに答えるものであるため、きわめて探究する価値のある概念なのである。

本稿の構成について述べておく。第1節では陶冶や共同体における伝統の継承によって、第二の自然を獲得するという解釈を検討するが、陶冶や教育のジレンマに逢着するために挫折するというところを見る。第2節では人間の理性がある意味で第一の自然であるという解釈を検討し、擁護する。

### 1 陶冶による接続問題の解決案

マクダウェルはアリストテレスの倫理学を解説することによって、科学主義的なものとは異なる自然的なありかたに目を開かせようとする（McDowell 1996a, Lecture IV section 7）。マクダウェルが解釈するアリストテレスは、バーナード・ウィリアムズやマッキンタイアが読むアリストテレスとは違って、「倫理の要求を人間の自然本性についての独立の事実から構成しよう」（McDowell 1996a, 79. 邦訳、138）とはしない<sup>(2)</sup>。このような立場は倫理に対して自然主義的基礎づけを行おうとするものだが、その背後にはアリストテレスにとっては無縁の不安が存在している。「すでに倫理的であるような考え方の外部からのその正当化」（McDowell 1996a, 84. 邦訳、144）が必要だと感じてられてしまうのだが、それは近代の自然観に特有の不安に由来する。アリストテレスにとっては倫理の要求と自然的であることはそのまままで調和している。

倫理的な性格は実践的知性に属する諸傾向を含むものである以上、性格形成の過程の一部として、実践的知性は一定の決まったかたちを獲得する。それゆえ、実践的思慮はその所有者にとって第二の自然なのである。

（McDowell 1996a, 84. 邦訳 144）

倫理的育成によって、人間は理由の空間のなかの倫理的領域に導き入れられる。思考と行為の習慣は第二の自然として、人間の生の一部となる。さらにこの論点は倫理を越えて一般化される。倫理的な性格の形成は、概念能力への導入という一般的現象の個別事例なのである。そして、概念能力への導入の過程が「陶冶（Bildung）」と呼ばれる。

アリストテレスが倫理的性格の成型を考える仕方を一般化することで手にできるのは、第二の自然の獲得によって自分の眼を理由一般へと開かせるという観念である。これにふさわしい簡潔な英語表現が私には思いつかないが、それはドイツ哲学において「陶冶」(Bildung)として登場するものに相当するだろう。(McDowell 1996a, 84. 邦訳、145)

「陶冶」においてもっとも重要な契機だとされるのが、言語の獲得である(McDowell 1996a, 125. 邦訳、207)。ある言語の獲得によって人間はひとつの文化に招き入れられる。言語を獲得することによって人間は理由の空間の住人となり、それは第二の自然を獲得することである(McDowell 2000a, 247. 邦訳、183)。

以上の描写に従えば、陶冶によって第一の自然と第二の自然が接続されるように思われるだろう。第一の自然を持って生まれた人間が、陶冶すなわち教育によって、特に言語の獲得によって第二の自然を獲得する<sup>(3)</sup>。

そうすると今度は陶冶の身分が問われることになる。陶冶はどのようなものなのだろうか。陶冶それ自体も自然的であるのだろうか。たとえば、ブーブナーは第二の自然の獲得は一度きりで完結するものではなく、陶冶という日々の行為によって、先行する世代から受け継いだものを確認することの連続だというし、マクダウエルもそれを否定しない(Bubner 2002, 215; McDowell 2002, 296)。あるいはホネットも、他者との不一致が生じた場合に反省によって第二の自然を修正できる余地を残せるよう、陶冶はヘーゲル的な学習過程であると理解しなければならないとする(ホネット 2015)。しかしそのように陶冶の概念を膨らませることにどれほどの意味があるのだろうか。そもそも陶冶は第一の自然と第二の自然を接続することができるのか。核心部分を突いた次のような指摘を見よう。ハルビツヒは、陶冶が法則の領界にあるもの(第一の自然)を第二の自然へと変形させると主張している。

マクダウエルは以下のように考えているようである。法則の領界としての第一の自然を第二の自然へと統合することは、法則の領界の一部をなす潜在能力の集合によって保証されるが、そのような潜在能力はそのためマクダウエルが陶冶(Bildung)という概念を利用するようなプロセスによって、第二の自然へと変容(transform)させられるのである、と。(Halbig 2008, 78)

ここで、ウィトゲンシュタイン＝ローティ的な静寂主義の立場から、マクダウエル自身はそもそも第一の自然と第二の自然はどのように結びつくのかという問いそのものの有効性を認めない(McDowell 2008, 221. cf. McDowell 1996a, 178. 邦訳、288)。マクダウエルからしてみれば、そこに説明を求めてしまうのが近代哲学の病理であり、科学主義的な偏見に毒されているということになるのである。マクダウエルはあくまでそのようなものではない自然観を提示するだけに留まろうとし、それだけで哲学的な治療にとっては問題ないと考えている。とはいえ、マクダウエルが積極的に語りたがらない素振りをして、彼自身実際にはあちこちで様々なことを言っているし、触発された他の哲学者によってこの問題は大きな展開を見せているため、問題そのものは有効だろう。以下では、陶冶によって第一の自然と第二の自然を橋渡しすることはできないと論じる。

問題は第一の自然というものをマクダウエルが二つの意味で使っていることにある(Rödl 2013b, 129)。一つはトンプソンの言う「生命形態(life form)」(cf. Thompson 2008)、すなわち「動物的生命体の存在を構成する活動の原理」(Rödl 2013b, 129)である。人間で言えばたとえば、何らかの言語を話す能力は第一の自然であるが、何らかの特定の言語(たとえば英語)を話す能力は第二の自然である(McDowell 2022, 405-406)。もう一つは法則の領界の名前としてのものである。マクダウエルは法則の領界に属する潜在能力の実現という考え方によって、人間の理性が「法則の領界のうちに足場(foothold)」(McDowell 1996a, 84. 邦訳、145)を与えられると言うが、「第一の自然」という語の曖昧さのゆえに一見したところ議論が成功しているように思われているだけなのかもしれない<sup>(4)</sup>。

いったい、人間の第一の自然が概念能力を獲得する潜在能力を含んでいるという主張をどう理解すればいいのだろうか<sup>(5)</sup>。人間の第一の自然を動物との連続性において捉える限りでは、第一の自然は法則の領界にのみ属するようなものである。マクダウエル自身もそのように考えている。潜在能力がたとえば歩く能力だとしたら、そのようなものが法則の領界に位置づけられ、科学的探究の対象になるとしても問題はないだろう。しかしここで問題になっている理性や概念能力はそのようなものではない。法則に支配されているものが、いかにしてもはや法則に支配されなくなるのかは謎のままである。

第一の自然は一部しか法則に支配されていないと考えるのはどうだろうか。この理解においては、第一の自然でありながら、潜在能力は法則の領界の外側に位置することになる。このことには端的に矛盾があるわけではないが、潜在能力の形而上学的身分が問題になるだろう。マクダウエルが意図した、

人間の理性に法則の領界のうちに足場を与えるという目的は達成されなくなるのである。それゆえ、マクダウェル自身はそのように考えない。「『心と世界』において、第二の自然に対立するものとしての第一の自然という観念に対する注釈のために私が提供する唯一の素材は、法則の領界という観念である」(McDowell 2000b, 97-98)。このように、マクダウェルが第一の自然と法則の領界を重ね合わせているのは明らかである。

このジレンマは陶冶という概念にも当てはまるだろう。陶冶のプロセスが完全に法則の領界に位置するものだとしたら、そのようなものがいかにして法則に支配されている潜在能力を法則に支配されないようにすることができるのか。あるいはそうではなく、陶冶のプロセスは一部が法則に支配されており、一部は支配されていないと考えるのはどうだろうか。その場合、「陶冶のプロセスにおいて、概念能力を形づくることは明らかに主体が既に獲得したそのような能力の行使と密接に関連している」(Gubeljc *et al.* 2000, 47)。しかしそのようなとき、陶冶において法則に支配されているものとされていないものをどのようにして区別できるだろうか。

ここでは教育におけるジレンマが問題になっている。「教育は理性的な (rational) 活動なのだろうか？そうであるなら、合理性は教育の結果ではありえない。そうでないなら、何が教育の結果であるにせよ、合理性はそれらの一部ではありえない」(Kern 2020, 275. cf. Haase 2017, 409-411) (6)。マクダウェルにもこのジレンマは当てはまる。そこでは、理性的であることと人間であることは区別して理解可能なものである。理性的でない状態で生まれた子供が、陶冶ないし教育によって、理性的になる。教育が理性的でないことと理性的であること（法則に支配されていることと法則に支配されていないこと）を媒介できると考えることにジレンマの原因がある。我々は陶冶ないし教育を既に理性的な活動とみなすか、理性的な活動とみなさないでどのようにそれらが理性的にするのか説明できずに途方に暮れるしかないように思われる。説明できなければ、教育による理性の獲得は、生まれつき理性を持って生まれるという理性主義者の説明と神秘的であることの程度は変わらないのである (Kern 2020, 276)。

## 2 人間が理性的動物であるということ

解決の道は、人間の第一の自然が既に何らかの仕方で理性的であり、動物とは区別されるということにしかないように思われる。マクダウェルはそこまで至っていないが、『心と世界』の時期から第一の自然に関して以下のように立場を変えている。変更前と変更後の引用を並べ

る。

ところで、生まれつき理由の空間に住み着いている生き物が存在するという想定は、理解可能なものであるかどうかさえ明らかではない。いずれにせよ人間はそうした生き物ではない。人間は単なる動物として生まれ、成熟してゆく過程で思考者にして意図的行為者へと変容してゆくのである。(McDowell 1996a, 125. 邦訳 207. 強調は筆者)

『心と世界』125頁において、私は以下のように想定する間違いを犯していた。成熟した人間を特徴づける第二の自然は第一の自然からの発達の時間的順序において二番目に来る。すなわち、人間はそれにふさわしい第一の自然をもった単なる動物として生まれ、育成を通じて精神的 (geistig) になるのであり、そのような育成によって人間は第二の自然を獲得するのである、と。私は第二の自然を獲得する潜在能力の重要性を適切に認めていなかった。人間が単なる動物として生まれると想定したことは間違いであった。(McDowell 2022, 403-404, n9. 圏点による強調はマクダウェル、下線による強調は筆者)

このようにマクダウェルは人間が単なる動物として生まれると当初想定していたが、その主張を取り下げている。第二の自然は第一の自然からの発達において時間的順序において二番目に来るのというよりは、むしろ何よりもまず概念的順序において二番目に来るのである。

トンプソンはマクダウェルの第一の自然の理解が狭隘なものだと批判する (Thompson 2013)。理性能力が第一の自然に属する可能性にマクダウェルは気づいていないというのである。トンプソンは第一の自然と第二の自然の区別以上に、第一の自然内部での区別があるとして、それを重視する。

トンプソンが否定的に評価するのは、人間であることと理性能力を持っていることを切り離して理解できるとする考え方である。たとえばカントは地球上の人間だけでなく、理性能力を備えてさえいれば火星にも当てはまるような倫理学を構想したが、このことは人間であることと理性能力の間に溝を想定することで可能となっている (Thompson 2013, 704. cf. Rödl 2013b)。しかしながら、先ほどのジレンマはこのような考え方のせいなのである。人間を理性が例化されうる存在者のなかの一つの類だと考えたせいで、理性は人間においていかにして例化されるかということが問

題になる。この考え方においては教育や陶冶の居場所も見出しにくくなる。ここでは理性という概念は人間の教育の概念を含んでいないからである。それゆえに先ほどのジレンマに逢着する。解決の道は、理性能力を現実化させる教育は人間と理性的存在者にあるとされた溝をどうにかして架橋するのではなく、そもそもそのような溝などないと考えることである。教育は理性的存在者の発達していく過程の一部に過ぎない。

マクダウェルはこれに対して以下のように応答している。

トンプソンの意味での第一の自然は、倫理的性格についてのアリストテレスの構想によって私が導入した一種のアリストテレス的な意味での第二の自然であるか、第二の自然のための潜在能力である。私は人間にとって第二の自然であるような能力を、人間が人間という種 (the human kind) の生物であるとはどのようなことであるかに外的な構成の一要素によって人間が持つような能力と見なしているわけではない。(McDowell 2022, 405)

すなわち、マクダウェルは理性能力が人間であることと切り離して理解できないという点でトンプソンに同意するのである。しかしながら、「第一の自然」と「第二の自然」の使い方に関してはトンプソンのものよりも自らの用法を推す。そして、トンプソンとマクダウェルの間にあるような立場の違いは実際にはないと主張する。

トンプソンが考える意味での第一の自然とはその生物種に普遍的なものであるが、それはその種の全ての個体が第一の自然を備えているからではなく、規範的な意味で、もしある個体はその第一の自然を備えていなかったら特別な説明が要求されるからである (McDowell 2022, 405. cf. Thompson 2008, 81)。すなわち、第一の自然を備えていないということは普通にありうることではある。たとえば、たいていのカゲロウは産卵をしないで死ぬが、「カゲロウは産卵をする」というのはカゲロウの第一の自然に属するだろう (Thompson 2008, 68)。そして、「多くの動物はそれらの第一の自然を構成するあらゆる能力 (power) をもって生まれてくるわけではない。(中略) 動物がある特定の能力を持って生まれてこないことは、その能力がその動物の第一の自然の一部ではないことを示すわけではないのである」(Rödl 2013b, 124)。たとえば、その種特有の歌を歌う鳥がいるとして、その鳥が生まれたときに歌を歌えないとしても、歌を歌う能力は第一の自然に属さないわけではない。

ここで以下の表を使って見てみるのがわかりやすいだろう。

表 1(7)

現実性	潜在性	(例)	マクダウェル	トンプソン
第二の 現実性		見る/歌う 作用	第二の自然	第一の自然
第一の 現実性	第二の 潜在性	見る/歌う 能力	第二の自然	第一の自然
	第一の 潜在性	見る/歌う 能力の欠 如	第一の自然	第一の自然

第一の現実性と第二の潜在性は同じ次元であり、これが普通の意味での能力である。第一の潜在性から第一の現実性＝第二の潜在性への移行は第二の現実性の作用を繰り返すことによってなされる。たとえば、鳥は繰り返し歌うことによって歌う能力を獲得するだろう。第一の潜在性は欠如として現れる。歌うことができなかつた鳥は第一の潜在性にとどまっているのである。

トンプソンは第一の潜在性と第二の潜在性（＝第一の現実性）をまとめて第一の自然と呼んでいる。第二の潜在性がない個体とは、その種に本質的な能力が欠如しているような個体のことである。たとえば、歌を歌うことがその種の本質であるような鳥が、歌うことができない場合である。しかしそのような鳥でさえ、その種に属している以上、第一の潜在性はあると言える。その鳥がその種に特有の歌を歌えないのは、他の種に特有の歌を歌えないのとは全く異なる意味をもつからである。他方、生まれたばかりでまだ歌を歌えない鳥は、それとは異なる。そのような鳥は、先ほどの鳥と異なり、第一の潜在性を、きちんと第二の潜在性へと移行させる可能性としてもつだろう。おそらく機能的に問題がなければ、その鳥は成長して歌うようになる。

人間において理能力が第一の潜在性や第二の潜在性としてどのように実現されているのか、マクダウェルの叙述からはいまだ明確になっていない。言語獲得の比喩を語るにとどまっている。そのため、我々がする必要があるのであるのは、人間と理能力に適用された場合どうなるかをもう少し詳しく説明することである。それは次のようになるだろう。幼児は第一の潜在性をもっている。しかしいまだ第二の潜在性の意味ではもっていない。

そして健全な幼児に限らず一般に次のことが言える。人間である以上、理性能力に関して第一の潜在性をもっていることは保証されているのであるから、人間は必然的に理性的動物である。

ここで、「生まれつき理由の空間に住み着いている生き物が存在するという想定は、理解可能なものであるかどうかさえ明らかではない」(McDowell 1996a, 125. 邦訳、207)という『心と世界』の発言を考えよう。これが今では間違っていることが分かる。人間は理性的存在者であるため、ある意味で生まれつき理由の空間に住み着いているのである。「完全な人間が例化する種は、幼児が例化する種と形而上学的に同じ種である」(Kern 2020, 278)。とはいえ、これは生まれつき幼児が理性能力を働かせることができるということではない(それでは第二の現実性を働かせることによってのみ獲得可能な第二の潜在性をすでにもっているということになってしまう)。マクダウエル言うとおりに、第二の自然を獲得する潜在能力を第一の自然として持っているということにすぎない。しかしながら、人間であることと理性能力は切り離して理解することができないため、理性能力が人間の場合においては(他の可能な理性的存在者とはちがって)どのように現実化されるかということがそもそも問題にならないのである。

これはある意味で問題の拒否ではある。ジレンマの片方は、第一の自然が法則の領界にのみ属するようなものだとしたら、いかにして法則に支配されたものがもはや法則に支配されないようなものを生み出せるのか理解できないというものだった。法則に支配されているものからもはや支配されていないものへの変容(transformation)が問題になっている。そのような変容を起こすものそのものが法則に支配されているのなら、どのようにして変容が起こるのかわからないのである。しかし、ここには変容に関する問題はなかったことがわかる。人間は理性的存在者であり、人間であることと理性能力は切り離して考えることのできないものであるため、理性能力を発揮していなくても人間はすでに法則に支配されていない理由の空間の住人として生まれると考えることができるのである。

そしてこのように理解することによってのみ、陶冶および教育のジレンマは解消される。しかしながら、人間の理性に法則の領界のうちに足場を与えるというマクダウエルの当初の目的が達成されなくなってしまうのではないかという懸念があるかもしれない。特に、このことが我々の第一の自然を理性的な能力であると見なすことならそういうことになる(cf. Haase 2017, 410)。マクダウエルは、理性能力は第二の自然であり、第一

の自然は法則の領界に支配されているものであるという描像を提示することによって、理性を自然のうちに位置づけようとしていたからである。しかし人間の第一の自然が理性的であるといっても、我々がここでマクダウエルに譲歩してもらうのは、あくまでも潜在能力において人間の第一の自然は理性的であるということだけである。そのことは立場変更前のマクダウエルもある程度認めていたが、その解釈がここでは変わっているのである。そして、ある意味で生まれつき人間は理由の空間の住人であると考えることによって、マクダウエルの以下の言葉も完全なものとなり、問題は本当になくなる。

人間の幼児は単なる動物であり、ただその潜在能力の点で特有なだけなのであって、人間がふつうに育成される過程でなにか不可思議なことが起こるわけではない。(McDowell 1996a, 123. 邦訳、205)

自発性の行使はわれわれの生の様態の一環である。そして、われわれの生の様態は、われわれが動物として自らを現実化する仕方にほかならない。それゆえ、この考えは次のように言い換えることができる。すなわち、自発性の行使はわれわれが自らを動物として現実化する仕方の一環なのである、と。(McDowell 1996a, 78. 邦訳、136)

ここで訂正されるのは人間の幼児は単なる動物であるという部分である。人間の幼児は単なる動物ではなく、すでに理性的存在者である。単なる動物が理性的存在者に変容するという不可思議なことが起こるわけではなく、理性的存在者がその潜在的な理性能力を発揮させていく過程があるというにすぎないのである。第二の自然はそのように発揮された理性能力であり、マクダウエルの当初の立場からの修正後も、依然として効力を持ち続ける概念なのである。

### 3 まとめ

本稿ではマクダウエルのいう第二の自然がどのように獲得されるのかという問題を扱った。第1節では、人間が最初は法則に支配された領域にしか関われないと考えると、第二の自然を実現する陶冶や教育が、法則の領界のみ住むものとして生まれた幼児を、理由の空間という全く異質なものにどのように住ませることができるのか理解しがたいということを見た。第2節では、人間は単なる動物として生まれるわけではないというマクダウエルの

立場変更後の方向を徹底化し、人間は第一の潜在性として生まれつき理性的であると主張した。

## 注

(1) マクダウェル自身はこの 3 つの立場の違いを現代に特有のものとして描いているが、おそらくは近代哲学にも同様の対立は見出せる (Haase 2017)。それは理性と習慣の関係についての 3 つの立場の違いに対応する。

(a) 理性は単に習慣である。この立場はヒュームに帰される。ヒュームは理性を動物の習慣と変わらないものだとみなす。人間と動物の違いは人間同士の間での理性能力を発揮している程度の違いと同じことになる。両者の違いは量的に異なるだけなのである。(b) 理性は全く習慣ではない。この立場はカントに帰される。理性は自然的でも動物的でもない。人間と動物は質的に全く異なる。(c) 理性は特別な習慣である。習慣をいくつか区別し、そのなかでも理性は独特な (*sui generis*) な習慣とされる。人間の陶冶 (*Bildung*) をという概念を中心的な主題とする。シラーやヘルダーに帰され、分析系の伝統においてはライルも該当するという (実際、『心の概念』において習慣が「第二の自然」であるという話が出てくる (Ryle 2009, 30-31))。マクダウェルもこの立場である。

(2) このような解釈者にはフィリッパ・フットおよびマイケル・トンプソンも含まれるだろう。(cf. McDowell 1996b)

(3) ここで陶冶および第二の自然という概念がヘーゲルに由来するかという問題を検討しておきたい。『心と世界』においては (および基本的にそれ以降においても)、川瀬和也の指摘通り、ヘーゲルはカント的認識論を徹底したものとしてしか名前が出てこない (川瀬 2018, 43-44)。しかし、解釈者たちが第二の自然をヘーゲルと結びつけても、マクダウェルはそれを端的に否定するわけではない (McDowell 2000b, 97)。とはいえ、マルクスにさえ参照指示があるのだから、第二の自然についてヘーゲルから着想を得ていたならば、たとえば『法の哲学』151 節や『エンチクロペディー』410 節に言及があってもおかしくないはずである。おそらくヘーゲル自身がアリストテレスから影響を受けていることがこのややこしい事態の原因となっている。まとめると、マクダウェルは第二の自然を直接ヘーゲルから受け継いだわけではなく、むしろアリストテレス解釈によってそれを得たが、ヘーゲル自身がアリストテレスに影響を受けているため、結果としてヘーゲルとマクダウェルは、相違があるにしても同じ概念に行きつき、その違いを解釈者たちは些

細なものとして無視するものもいれば注目するものもいるということになっていると思われる。

レードルは、マクダウェルとヘーゲルの違いを以下のように特徴づける。「マクダウェルは第二の自然という概念を自発性がいかにして自然的実在であるのかを示すために用いるが、ヘーゲルはその概念は人間がいかにして精神的実在でありうるのか説明するために必要なものであると思っている」(Rödl 2013a, 652)。すなわち、精神的なものと自然的なものとのどちらから説明するのかという順序において、マクダウェルとヘーゲルは逆だということである。

(4) レードルは、マクダウェルの「第一の自然」の曖昧な使用は、自然を超越したものとしての理性という観念の原因というよりその表明であると考えている (Rödl 2013b, 130)。

(5) 以下の論述では Gubeljic *et al.* (2000, 46-47) を参考にしているが、そのままではない。

(6) もちろんこのジレンマは『哲学探究』に由来する。

(7) Haase (2017, 412) を参考にしている。ハーゼはアリストテレス用語で解説しているが、わかりやすさのために言い換えたものを用いる。

## 文献表

- Bubner, R. (2002) "Bildung and Second Nature", in N.H. Smith (ed.), *Reading McDowell: On Mind and World*, Routledge, pp.209-216.
- Conant, J and Kern, A. (2017) "Analytischer Deutscher Idealismus. Vorwort zur Buchreihe," in *Selbstbewusstes Leben*, hrsg. von Andrea Kern und Christian Kietzmann, Suhrkamp, S.7-10.
- Gubeljic, M., Link, S., Müller, M., Osburg, G. (2000) "Nature and Second Nature in McDowell's Mind and World", in Marcus Willaschek (ed.), *John McDowell, Reason and Nature: Lecture and Colloquium in Münster 1999*, LIT Verlag, pp.41-50.
- Haase, M. (2017) "Geist und Gewohnheit." in *Selbstbewusstes Leben*, hrsg. von Andrea Kern und Christian Kietzmann, Suhrkamp, S.389-426.
- Halbig, C. (2008) "Varieties on Nature in Hegel and McDowell," in Jakob Lindgaard (ed.), *John McDowell, Experience, Norm, and Nature*, Brackwell, pp.72-91
- Kern, A. (2020) "Human Life, Rationality and Education." *Journal of Philosophy of Education*, 54, no. 2 (Spring 2020), pp.268-89.

- McDowell, J. (1996a) *Mind and World: with a new introduction*, Harvard University Press. (『心と世界』、神崎繁・河田健太郎・荒畑靖宏・村井忠康訳、勁草書房、2012年)
- (1996b) “Two Sorts of Naturalism,” reprinted in his *Mind, Value, and Reality*, Harvard University Press, 1998, pp.167-197. (「二種類の自然主義」、佐々木拓訳、『徳と理性』、大庭健編・監訳、勁草書房、2016年)
- (2000a) “Experiencing the World” , reprinted in his *The Engaged Intellect*, Harvard University Press, 2009, pp.243-256. (「世界を経験する」、荒畑靖宏訳、『現代思想』32-8、2004年)
- (2000b) “Responses,” in Marcus Willaschek (ed.), *John McDowell, Reason and Nature: Lecture and Colloquium in Münster 1999*, LIT Verlag, pp.91-114.
- (2002) “Responses,” in N.H. Smith (ed.), *Reading McDowell: On Mind and World*, Routledge, pp.269-305.
- (2008) “Responses,” in Jakob Lindgaard (ed.), *John McDowell: Experience, Norm, and Nature*, Blackwell, pp.200-267.
- (2022) “Second Nature and Geist”, in *Zweite Natur : Stuttgarter Hegel-Kongress 2017*, edited by Julia Christ, and Axel Honneth, Vittorio Klostermann, pp.397-408.
- Rödl, S. (2013a) “Introduction,” in *Freiheit : Stuttgarter Hegel-Kongress 2011*, edited by Gunnar Hindrichs, and Axel Honneth, Vittorio Klostermann, pp.651-655.
- (2013b) “Reason and Nature, First and Second”, in *Freiheit : Stuttgarter Hegel-Kongress 2011*, edited by Gunnar Hindrichs, and Axel Honneth, Vittorio Klostermann, pp.119-130.
- Ryle, G. (2009) *The Concept of Mind 60th anniversary edition*, Routledge.
- Thompson, M. (2008) *Life and Action: Elementary Structures of Practice and Practical Thought*, Harvard University Press.
- (2013) “Forms of nature: „first“, „second“, „living“, „rational“ and „phronetic“”, in *Freiheit : Stuttgarter Hegel-Kongress 2011*, edited by Gunnar Hindrichs, and Axel Honneth, Vittorio Klostermann, pp.701-735.
- 川瀬和也(2018)「自然的かつ「独特」な概念能力——マクダウエルの「第二の自然」の批判的検討」『宮崎公立大学人文学部紀要』、25巻1号、pp.37-

49。

ホネット、アクセル(2015)「解釈学とヘーゲリアニズムのあいだ——ジョン・マクダウェルと道徳的実在論の挑戦」、『見えないこと——相互主体性理論の諸段階について』、宮本真也・日暮雅夫・水上英徳訳、法政大学出版局、pp.153-198。